イスラームにおける水の役割

おやさと研究所講師
澤井　真　*Makoto Sawai*

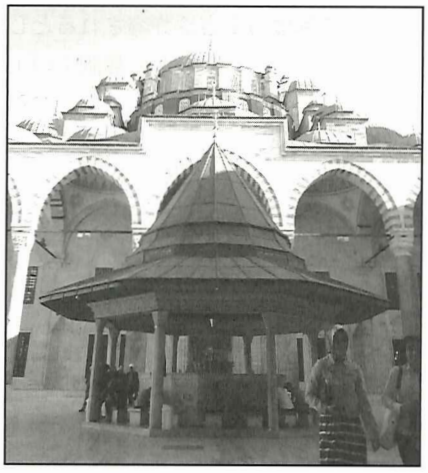
私たち人間の暮らしにおいて水は不可欠である。水なしに生きることができる生物は、地上に存在しない。まさに、生命活動において、水は最も重要なものの一つである。今回は、イスラームの信仰生活と水との関わりを取り上げたい。

「水場」へ到る道

アラビア語で「シャリーア」（sharī‘ah）という語は、日常生活では、「道路」や「通り」を意味する語として頻繁に用いられている。砂漠に住むベドウィンらは、「シャリーア」を、動物たちが集って水を飲む水場や、動物が生息する海岸を指して用いたようである[1]。

それに対して、宗教的な文脈において、「シャリーア」という語は、ムスリムの守るべき教えを意味する。それは、シャリーアが「（水場へ到る）道」を原義とするからである。この文脈において、「水場」はいわゆる神や救済を意味しており、ムスリムはそれらへ到る道を歩むことになる。生命活動が水なしでは生きられないように、信仰活動にも水場が不可欠である。「水場」、すなわち神の救済へ到る方法を知り、実際に到る道を歩むための教えが、イスラームでは示されているのである。

礼拝で用いる水



礼拝前にウドゥーを行なう人々
（2014年トルコ　筆者撮影）

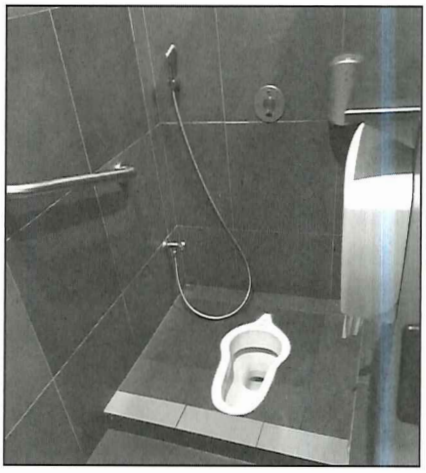
1日5回の礼拝の前にムスリムは浄めを行なう。これらは「ウドゥー」や「グスル」と呼ばれており、日本語ではそれぞれ「小浄」（wuḍū’）や「大浄」（ghusl）とも翻訳されてきた。ウドゥーは睡眠や用便の後に、グスルは月経や性交の後などに行わなければならない。両方とも、水を用いて行なうが、水がない場合は清浄な砂でも良いと言われている。

ウドゥーの順序については、『岩波イスラーム辞典』によると、以下の13順序から成る。

1）ウドゥーの意思表明をする。
2）ビスミッラーと唱える。
3）両手を3回洗う。
4）口を3回すすぐ。
5）鼻に3回ずつ水を吸い、吐き出す。
6）顔を神の生え際からあご髭の先まで、横は耳から耳まで3回洗う。
7）右手を肘まで3回洗う。
8）左手も同様。
9）濡れ手で1回頭を前からうなじまでなで、始めのところに戻る。
10）手に残った水で耳の表と裏を擦る。
11）右足をくるぶしまで洗う。
12）左足も同様。
13）最後にウドゥーの祈りをする[2]。

グスルは、ウドゥーの前後に清浄にするための所作が追加される。中山正善2代真柱が、昭和5（1930）年に中国巡教の際にイスラームのモスクを訪れた際に、礼拝前の浄めを見学している。「それは単に身体を清めるといふだけの意味ではなく、同時に心をも清める、そして清らかな心になつて始めて礼拝を行ふといふ意味を含んで居るからです」[3]と記されているように、水を用いた浄めの目的は、単に身体を綺麗にするためだけではなく、礼拝に向かうための精神的な準備を行なうためでもある。

イスラームのトイレ事情



空港内のトイレ
（2020年シンガポール国際空港　筆者撮影）

近年、日本では洋式トイレに加えて、温水洗浄便座が普及しつつあり、和式トイレが少しずつ姿を消している。しかしながら、用便のたびに排泄部位を洗浄する人は必ずしも多くないのではないだろうか。

しかしながら、東南アジアや中東へ行くとトイレ事情は異なり、面食らう日本人旅行者も多い。筆者も、「トイレに入ると中が水浸しだった」と驚いて帰ってきた日本人に何人か会ったことがある。近年では、空港のトイレにも水が出るホースやウォシュレットのようなものが設置されている。ムスリムのためだけのものではないかもしれないが、少なくとも多くのムスリムは、用便後に水を用いて洗うのが習慣となっている。

アブデュルレシド・イブラヒム（1857～1944）は、日本で没したムスリムで、日本を代表するイスラーム研究者である井筒俊彦（1914～1993）に個人教授を行ない、東京モスクの初代イマームを務めた人物である。自伝『ジャポンヤ』（*Âlem-i İslâm ve Japonya'da İntişar-i İslâmiyet*）のなかには、イスラームへ改宗したトゥラーブ・アリーザーデの日本人の妻が、トイレに入るときに水差しを持って入るようになったという記述がある[4]。つまり、排泄後に水を用いるようになった妻に、ムスリマ（ムスリムの女性形）としての信仰的行為を見出したのである。和式トイレを使用してきた筆者には、それほど違和感はなかったが、コロナ後に海外旅行へ赴かれる際には、海外の空港のトイレにも注目していただきたいと思う。

［註］

（1）“Shar‘īa,” in *Encyclopaedia of Islam (2nd edition)*, p. 326.
（2）「ウドゥー」『岩波イスラーム辞典』、岩波書店、2002年、199頁。
（3）中山正善「現代支那に於ける宗教運動（その二）」、『みちのとも』（昭和5年6月5日号）、11頁。
（4）アブデュルレシト・イブラヒム（小松香織・小松久男訳）『ジャポンヤ：イブラヒムの明治日本探訪記』、岩波書店、2013年、348頁。